

東京外国語大学 大学院 国際日本学研究院 2017年度 連続講演会・国際シンポジウム



国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—

今年度は日本語教育を取り巻く諸相から国際日本学を考えます。日本語教育の中心には、ことばを学ぶ「ひと」がいます。「ひと」を取り巻く社会や文化、「ひと」が使うことばを意識したうえで見えてくる「国際日本研究」とは、そして、これからの日本語教育とはどのようなもののでしょうか。各ご講演では、本学関係者を指定討論者に迎え、議論を深めます。その場で生まれるシナジーにもご期待下さい。

第1回 2017年9月29日(金)



砂川 裕一 氏
(国際交流基金)

「言語・社会・文化の統括的教育
実践の理論化」という意想について

第2回 2017年10月19日(木)



鈴木 孝夫 氏
(慶應義塾大学)

なぜいま、日本語を
世界に急いで広める必要があるのか

第3回 2017年11月9日(木)



田中 宝紀 氏
(青少年自立援助センター)

外国ルーツを持つ子どもと日本社会
—多様性が豊かさとなる未来へ—

第4回 2017年12月8日(金)



石黒 圭 氏
(国立国語研究所)

学習者コーパスに見る日本語の世界

第5回 2018年1月18日(木)



デービッド アトキンソン 氏
(株式会社 小西美術工藝社)

"Omotenashi"の先へ
—観光で国をひらくということ—

各回 17:45-19:15
於 研究講義棟 101教室

入場無料／申込不要

2018年2月10日(土) 国際シンポジウム

国際日本学を考える—日本語と日本語教育—

第一部 講演

迫田 久美子 氏 (広島大学)

学習者言語の研究から考える



第二部 パネルディスカッション

研究言語としての日本語

寺田 澄江 氏
(フランス国立東洋言語文化大学 (INALCO))

バルバラ ピッツィコーニ 氏
(ロンドン大学SOAS)

アヤ エザワ 氏 (ライデン大学)

ジョン ポーター (東京外国語大学)



入場無料
申込不要

10:30-16:30
於 研究講義棟 101教室

主催 東京外国語大学 大学院国際日本学研究院
共催 東京外国語大学 留学生日本語教育センター

お問い合わせ 東京外国語大学国際化拠点室
042-330-5829 caas_admin@tufs.ac.jp

❖ 結びにかえて+ (資料) アンケート総計はこちら

2017年度連続講演会「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」第1回

「言語・社会・文化の統括的教育実践の理論化」という意想について
砂川裕一氏（国際交流基金日本語国際センター所長，群馬大学名誉教授）

場所：101 教室 日時：2017年9月29日（金）17:45～19:15

国際日本学研究院 2017 年度連続講演会「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」のキックオフとなる第1回講演会は、国際交流基金日本語国際センター所長の砂川裕一氏を迎えて行われた。本年度の連続講演会は日本語教育をその根幹に据え、日本語教育と国際日本研究の交わるところに、本学国際日本学のフレームワークにおける日本語教育の意味を見出していきたいと考えていた。砂川氏は、長年にわたって、群馬大学にて留学生教育に携わっておられ、特に日本語教育だけでなく、日本事情教育に従事なさってきた。砂川氏のご講演はこの日本事情教育を出発点に、砂川氏の過去の研究による分析を踏まえながら進められた。

ご講演では、まず日本語日本事情教育を含む言語教育が、言語要素の教育といわれる状況だけではすまなくなっていることを踏まえ、言語の側面だけでなく、社会的側面及び文化的側面、そして、歴史的側面や心理的側面も包括する形で教育実践をとらえなおし理論化することが必要だという立場で議論を進める必要性が示された。特に、日本事情という科目は、何を対象とするか、そしてどのような形で知的活動における教員と学習者の双方向性を維持するか、最後に教育的機能の多様性をどのように見出すか、という3つの軸で立体的にとらえようと試みる事が提案された。

なお、ご講演では特に、日本事情教育の中で、言語的運用力の強化という機能がどのように果たされるか、ということに焦点を絞って解説が行われた。砂川氏が言語運用の観点から日本事情を紐解こうとなさった背景には、やはり言語の価値・位置づけの重要性があったからであった。この点は、ご講演の終盤で、「言語的コミュニケーションの対人的・社会的・文化的内実」として、「自らの立場を自覚し」、「同時に相手の立場に身を置きつつ、想像力と柔軟性を獲得する」ことの重要性に言及なさったことからもしっかり見て取れるところであった。社会・文化・自然・世界に対しての「言語」の位置づけを明確にし、そのうえで言語習得と自己形成の構造について、また、言語運用力を高めることとその文化・社会的な自己実現の関係性を論点に、言語・社会・文化の統括的教育実践を理論化しようという試みが、日本事情教育の中での学習者の成長を促すという視点につながっているということが示された。

なお、本講演会では、講演内容をより深くとらえるための質問とコメントを繰り広げることを狙いとして、各回に本学大学院国際日本学研究院の教員が指定討論者として登壇する形をとった。第1回は荒川洋平教授が指定討論者を務めた。荒川教授による質疑は大きく3つの観点から、砂川氏の講演を切り取り、より深めるための発題が提示された。特に、協同（共同）の学びの意義について、「日本人学生、教員、ビジターセッションなども交え

ることでさらにもっと面白い協同の学びが生まれるだろう」という観点について、具体的にどう進めるのかという実践に根付く質問が出されたが、砂川氏からは学生同士がお互いの相互比較をしながら学ぶだけでなく、「教師」としてレクチャーする立場ではなく教員もなるほどと学ぶことが重要だというコメントが得られたことは大きかった。

最後に、フロアからの質問を砂川氏に 15 分間ほど受けていただいた。特に、本学留学生日本語教育センターにて予備教育の政治経済、日本事情科目を担当している春名展生講師から、日本事情教育に関する質問が投げかけられた。ここでは、日本事情教育を担当する教員の属性が様々になっていることを踏まえ、改めて日本事情教育が求められるものとはどのような内容なのかという根本的な議論が展開された。砂川氏からは、最後に日本事情教員として求められる人材は、知識自体は全国紙が読めるくらいの知識でもよいが、読んでこういうことが書いてある、あなたはと思う？と聞けることが重要であること、そして、新聞の中の多様なレベルの記事を選べる力として、社会や文化についての新聞に載っている視野の広さを持つておくことが重要だというコメントが得られた。

以上で、砂川氏の講演は終了となり、大きな拍手で会場が包まれた。会場となった 101 の教室に多くの聴衆が来場し、盛況のうちに会を終えることができた。

(文責・石澤徹)

2017年度連続講演会「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」第2回

なぜいま、日本語を世界に急いで広める必要があるのか

鈴木孝夫氏（慶應義塾大学名誉教授）

場所：101 教室 日時：2017年10月19日（木）17:45～19:15

国際日本学研究院 2017年度連続講演会「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」の第2回講演会は慶應義塾大学名誉教授の鈴木孝夫氏をお迎えした。

鈴木孝夫氏は言語学者として半世紀以上にわたって日本語、英語を中心とする言語学研究の世界に身を置いてこられた。昨今の世界情勢を受け、世界の平和と安定の重要性のために、「日本」にかかわる者、特に日本語教師を目指す若い世代がこれから何を目指すべきかについて、御年90歳を超えられた今も、精力的にご講演をして回っておられるとのことであった。ご講演を通してのメッセージとして、アイデンティティーを見つめ、とらえ、世界からの視点を意識することの重要性について説かれたものであった。

ご講演の中でもふれられたが、鈴木氏は、日本語・日本文化の特性として、「タタミゼ」を挙げておられる。元はフランス語の俗語で「日本化する」という意味であったが、これはネガティブな意味ではなく、それこそ日本語・日本文化のもつポジティブな力であるというお考えのもと、世界に「タタミゼ効果」を広めることが大きな意味を持つという立場で論を展開なさっていた。具体的には、「ある人が日本語をある程度の時間、学んだり日本の文化に親しむようになると、いつしかその人のものの言い方が優しくなったり、周りの人たちに接する態度が柔らかくなったりする」ことがあるという氏の実感から、日本語を学び、日本文化に接してもらうことから、他人に対して攻撃的になるのではなく、むしろ穏やかで協調性のあるものになるように世界を導いていくべきだというものである。

また、鈴木氏は「このタタミゼ効果をどのように世界に広げるか」にこそ意味があるという点も主張なさっていた。その理由は、たとえ一人の人物が穏やかになったとしても、その人物が国において異質のもののみなされてしまえば、世界を穏やかなものにはできないという観点からである。これを変えていくためには、日本語や日本文化の価値を日本にかかわる人々が再確認・再認識し、世界と接していくことに大きな意味があるということ、そして日本語教師は世界の平和に向けての大きな役割を担っているのだということを改めて考える機会として提示していただいたご講演だったと感ぜられる。

今回の指定討論者には、本学副学長の伊東祐郎教授が立たれ、質問とコメントを行った。日本語教師として長年、日本語教育現場に携わってこられた伊東教授は、ご自身のご経験も踏まえた形で日本語教師にとって大切なことという観点を中心に据えたコメントだったように思える。まず、「これからの日本語学習者像」を考える場合、その変化に対して日本語教師はどう向き合っていくか、という観点からの質疑が繰り広げられた。日本の経済も社会も変わる中で、ゼノフォビアが生まれる状況がある。これを日本独自の視点で質を変えていくことが重要だとのコメントがあった。また、日本語の「タタミゼ」の力が最大限

に発揮されるのはどのような時であるかについても改めてお尋ねになった。そこで鈴木氏は、「相手のことを常に考える」という配慮の姿勢が求められることが示唆された。最後に、メッセージとして示されたのは、過去の豊かな経験を持つ人物から多くを学び、未来につなげていくことが重要であることが示された。フロアとの質疑の時間をとることはかなわなかったが、それだけ充実した時間となったことは間違いない。大勢の聴衆からの惜しみない拍手をもって、講演会は終了となった。

(文責・石澤徹)

2017年度連続講演会「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」第3回

外国ルーツを持つ子どもと日本社会 —多様性が豊かさとなる未来へ—

田中宝紀氏（NPO 法人青少年自立援助センター一定住外国人子弟支援事業部責任者）

場所：101 教室 日時：2017年11月9日（木）17:45～19:15

国際日本学研究院 2017年度連続講演会「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」第3回は、NPO 法人青少年自立援助センター一定住外国人子弟支援事業部責任者の田中宝紀氏をお迎えして、外国にルーツを持つ子どもの支援という日本語教育の視点から、日本社会における多様性のありかたについて考える機会をもった。田中氏は福生市にて YSC グローバル・スクールを運営する他、日本語を母語としない若者の自立就労支援に取り組んでこられ、現在までに 22 カ国、500 名を超える子ども・若者を支援してこられた。

ご講演では、YSC の事業の紹介と YSC に通っている子どもを含む外国にルーツがある子どもたちの実態について説明があった。YSC は言うならば「日本語学校×フリースクール×塾のような存在」であり、ある程度日本語ができる子どもには教科学習支援を行い、日常会話はできるが学校の勉強にはついていけない子どもには放課後教室としての役割を果たすことを設立の目的としている。YSC に来るような人たちは日本社会とのつながりがない場合が多いため、なるべく色々な体験ができるように、様々な活動を行っているそうだ。

外国につながる子どもたちの現状として、YSC の調査では、今後帰国しないと答えた子どもが 97%に達していたことから、帰国せず日本社会で生きていくという前提で支援することの重要性が語られた。現状として、外国にルーツを持つ子どもたちにとっては、両国間の架け橋になるといった可能性より、課題の方が大きい。たとえば、日本語指導が必要な子どもは全国に 4 万 3 千人いるが、日本の学校に通っているが何のサポートも受けられない子どもは 1 万人いる。受け入れ態勢が整っていない場合、自治体によっては外国にルーツを持つ子どもたちの受け入れ体制が整っていないところもある。そのようなところでは、「日本語が分からず学校の勉強についていけなくてかわいそうだから、どこかで日本語を勉強してから来てください。」と言われることもあるため、自治体と子ども&保護者をつなぐ支援も必要であることがわかる。2015 年現在で日本に暮らす外国にルーツを持つ人の数は 333 万人近くに上り、25 年後には 2 倍以上になる見込みでこれから増え続けることは間違いない。外国にルーツを持つ子どもも増えると予想される中、日本社会の一員である私たち、そしてこの子どもたちはどのように生きていくのかを考えることが重要だと、やさしい語り口でわかりやすく語りかけてくださった。

一方、課題を可能性へと変えるための活動を YSC でしていきたいという強い思いが田中氏をはじめ YSC を支える人たちを動かしていることがよくわかるお話もあった。具体的には、「〇〇×日本語教育・多文化対応」として、「保育」や「若者支援」に日本語教育・多文化対応をかけ合わせていくことで、解決を目指すべきだという主張があった。様々なセクターと連携することで、今までできなかったような支援を実現させる。こうしていくこ

とが、多様性が豊かさとなる社会の基盤づくりとなり、社会の多文化化につながるということが説かれた。YSCは元々日本人向けの若者支援の団体だったが、2010年に新たに定住外国人子弟支援事業部を新設し、日本政府からの日系ブラジル人子弟支援のための事業委託を受け、職員はボランティアではなく最初から有給雇用で事業を始めることができた。職員は専門家であり、有料ではあるが質の高い支援をすることができている。田中氏自身は日本語教師という立場ではなく、YSC グローバル・センターの運営責任者という立場から、どのように安定した形で教育を提供するかを考える立場にあるというご説明があった。安定した支援を供給するためにできることをどんどん行い、情報発信をしていきたいという思いも語られ、田中氏の強い信念と決意を感じるご講演だった。

なお、指定討論者の春名展生講師（東京外国語大学）からは、政治学や社会学の視点からのコメントと質問があった。YSCの取り組みは、政治的に考えれば、外国人受入反対に対するカウンターアージュメントになっているという分析が述べられ、多様性が豊かさとなる社会とはどのようなものか、というテーマの本質について改めてとらえなおすための問いが投げかけられた。これに対して田中氏は、若い世代が多様性を受け入れやすい考えを持っていることをデータで示し、多様性が日本社会にとって重要だという意識の変革を目指し、前向きに議論をすることが重要であるという回答が引き出された。この点については、フロアからも質問が続き、若い世代が社会を変えるためには、発信力を高めることが重要であることが述べられた。指定討論及びフロアからの質問はほかにも多岐にわたっており、家庭の経済状況が子どもたちのリーディングスキルにつながることや民族性の問題についてコメントがあった。様々な考えかたがあるが、しっかりと考えを議論していくことが課題を可能性に変える鍵であることは本講演会から得た一つの答えであろう。ご講演及び指定討論の濃密さは、田中氏のわかりやすいご講演のおかげであるとともに、日本社会において外国につながる子どもたちへの支援が重要であるという意識がオーディエンスにも共有されていたこととも関係していたのではないだろうか。

（文責・石澤徹）

2017年度連続講演会「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」第4回

学習者コーパスに見る日本語の世界

石黒圭氏（国立国語研究所教授）

場所：101 教室 日時：2017年12月8日（金）17:45～19:15

国際日本学研究院 2017年度連続講演会「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」の第四回は、国立国語研究所教授で一橋大学連携教授も務める石黒圭氏を迎えておこなわれた。

まず冒頭では、コーパスとは、学習者とは、学習者コーパスとはどういうものか、簡単な説明が行われ、日本語を学んでいる学習者による書き言葉・話し言葉を大量に集め文字化しデータ化した資料を使って、学習者の日本語 4 技能（聞く・読む・話す・書く）を分析するという、今回の講演の目的が説明された。

「聞く」では、日本語の語や連語が学習者の耳にどう聞こえているかが紹介された。特に中国語母語話者の学習者には、濁音、促音、撥音、拗音、長音、子音といった単音レベルでの苦手な音があることが紹介された。さらには、語彙レベルで外来語の聞き取りも苦手であること、さらには、脳内辞書の語彙不足から、出てくる語を予想しながら聞くという母語話者の戦略が使えず、聞き取りがうまくいかない例（「実感がわからない」を「時間が分からない」と聞くなど）が紹介された。学習者のこうした体験から日本語の実態が分かり、日本語の発音について日本語母語話者にも気づきがあると述べられた。

「読む」では、固有名詞や外来語を学習者がどう理解しているか紹介された。母語話者が読むときは試行錯誤をしつつ、予想して読んでいるが、予想ミスがあれば、理解を文脈にアジャストしていく。しかし、学習者はこの調整が難しいという。例えば、ある単語が一般名詞か固有名詞かという理解は大変難しい場合があるとのことである。例として、「愛は真理と口論することがある」のような文では、「愛」や「真理」を固有名詞（人名）と理解することは、中国人日本語学習者にはかなり困難であるとのことである。一般名詞として理解し、「口論」を「矛盾」と処理してしまったりする。また、外来語も文化的背景が分からないとその外来語が理解できないということがあるとのことである。例えば、「ソフト」をソフトクリームと理解するのは中国人日本語学習者にはかなり困難とのことである。中国にはソフトクリームがほとんどないからである。

「話す」では、無声映画を見せてその話を日本語で再生させるという課題を中国人日本語学習者や日本語母語話者大学生に行って、その違いを分析した。来日経験のない中国人学生は、教科書の影響もあってか「それから」「そして」などの接続詞が多いが、日本に留学した中国人学生は日本人も使うような接続詞「で」「あと」などが使えるようになっていたことが分かった。さらに日本語母語話者の学生は、接続詞はほぼ「で」しか使わず、動詞もテ形ばかりで文を切らずに、単調で単純な話し方をすることが分かった。

最後に「書く」では、学習者の作文添削の工夫例が紹介された。「漢字一字で私を表すと

したら」という課題で書かれた作文に対して、日本人教師が添削する際、3色ボールペンを使って、修正すべき箇所は赤色で、不自然なところは青色で、うまく書けているところは緑色で指摘する方法である。これによって、自信がない学習者には緑色でポジティブなフィードバックができ、自信がありすぎる学習者には赤色で警告も与えられるといった効果があることが紹介された。添削後には教師が説明する時間を持つなどして、修正させ、さらに添削すると、緑色の添削が増え、学習者の自信向上にもつながるとのことだった。

以上の4技能の分析から、外国人の日本語を通して、私たちの使う日本語の姿を見ることができると締めくくられた。

その後、指定討論者である、藤村知子教授（本学留学生日本語教育センター長）との討論が行われた。まずコーパスについて、学習者コーパスはどうやって入手するかという問いに対しては、石黒氏からインターネット上にいろいろなコーパスがあることが紹介された。国立国語研究所でも、迫田久美子氏による世界の12言語、20地域の50人ずつ、計1000人の話し言葉と書き言葉を集めるコーパスがあり、宇佐美まゆみ氏のBTSJ会話コーパスも紹介された。さらには、いろいろな研究者が集めているコーパスを研究所がまとめてほしいという要望も藤村教授から出された。

また、各技能に関する議論として、「聞く」については、中国語を母語とする学習者以外の学習者の分析も知りたいという問いかけがあった。それに対して、今後いろいろな母語話者のデータを集める予定であることが紹介された。「読む」については、固有名詞の正しい理解には文脈情報が必要で、特に重要なものは何かという指摘があった。石黒氏は、固有名詞は日本に留学したり、社会経験を積んだりすると理解できるようになると説明された。「話す」については、ストーリーテリングコーパスの研究の目的は何かとの問いが出された。石黒氏は、人前で話すときに役立ってほしいので、独話の分析に関心があるとの説明があった。さらには、昔の記憶を話すときと最近の記憶を話すときで話し方に違いがあるのかも興味の対象だとのことであった。上級者は日本語で考えて話せるようになっていき、日本人と同じ発想の仕方をするようになる人もいるが、母語のスタイルが残る人もいるとのことであった。母語のスタイルを残して話すような、自分らしい発想をする人も素敵で、必ずしも日本人のようになることだけを学習の目的としなくてもいいだろう、とう考えも述べられた。

最後に、フロアからの質問を石黒氏に15分間ほど受けていただいた。まず、聞き取りの理解について質問があった。今回の発表では聞き取りで単音が扱われたが、実際には音の聞き取りだけではなく、文脈理解や既知の知識との結びつきが重要になってくるだろう。何をもって理解と考えるか、との質問があった。石黒氏からの返答としては、確かに文脈の理解、推測能力も大事になるとのことであった。ただ文脈も含めた、単音よりも長い単位の聞き取りも実験したいが、まだ試行錯誤中とのことであった。

つぎに、文章理解については、語彙が分からなければ文章の意味が分からないだろうが、語彙理解と文章理解の関係についての質問があった。石黒氏は、95%以上の語彙が分かっ

ていないと文章をよく理解できない，という研究結果もあることを紹介された。実際の指導では，現代であれば，スマートフォンで写真を撮り，そこに書かれた文字の読み方や意味を表示するようなアプリもあるので，そういったものも使っていくのが現実的だろうとのことであった。

最後に，ストーリーテリングの話し方で，日本人学生のはダラダラ話しており，外国人のものの方が論理的ではっきりしていることから考えると，日本人らしく話すということが必ずしも良いわけではないのではないか，という質問があった。石黒氏は，外国人と母語話者区別せず，両者が魅力的に，良いところは伸ばしつつ書き，話せるようになるのが望ましいだろうと返答された。

以上で，石黒氏の講演は終了となり，大きな拍手で会場が包まれた。会場となった 101 の教室に多くの聴衆が来場し，盛況のうちに会を終えることができた。

(文責・阿部新)

2017年度連続講演会「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」第5回

"Omotenashi"の先へ —観光で国をひらくということ—

デービッド・アトキンソン氏（株式会社小西美術工藝社代表取締役社長）

場所：101 教室 日時：2018年1月18日（木）17:45～19:15

国際日本学研究院 2017年度連続講演会「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」の第五回は、株式会社小西美術工藝社代表取締役社長を務めるデービッド・アトキンソン氏を迎えた。アトキンソン氏は、元ゴールドマン・サックス証券会社で金融アナリストを務めていたが、その後2007年に退社し、2009年に小西美術工藝社に入社し、その後現職に就いた。文化財修復の大手企業の社長を務めると同時に、京都国際観光大使、東京の観光振興を考える有識者会議メンバー、二条城特別顧問などを歴任し、文化財保護に限らず、広く観光行政・観光産業への提言を行っている。今回のご講演は、最新の著書『世界一訪れたい日本のつくりかた』に基づいたものとなった。

まず冒頭では、タイトルの“Omotenashi”になぞらえて、日本人が外国人観光客に提供したいと考える日本の良さと、外国人観光客が期待するものが全く異なることが説明され、その違いをまず認識することが重要だと説明があった。例えば、おもてなし、治安、新幹線の正確さ、手先が器用といったことは外国人にとって何の意味もないことをまず認識すべきだとのことであった。

世界の観光産業の現状を見ると、今や、観光産業は化学製品、燃料に次いで第3の基幹産業ともいえる規模となっており、全世界のGDPの10%、世界総輸出の7%を占めるまでになっている。また、世界観光客数は2016年には12億人以上で、2030年までには18億人になると予測されているという。日本への観光客数も大きく伸びており、2016年の観光客数は世界で14位、国際観光収入ランキングも世界で11位となっている。しかし、2017年には、観光客数のランキングでは10位にまで上がっているはずであるが、観光収入はそれほど多くないという。

日本は、観光大国となるための条件、すなわち自然、気候、文化、食事の4つに恵まれた稀有な国であり、「多様性」というキーワードが当てはまる国であるのに、観光収入が多くないのは、まだ注力していない部分があるからであるという説明も行われた。その例として、「文化」や「食事」ばかりを前面に押し出していて、「自然」に関する発信を全く行っていないことが挙げられる。観光客への調査を行うと、自然を相手にした観光を行いたいという客が多いのに、文化に関する発信ばかりしている。特に、ヨーロッパからの観光客は2、3週間滞在する人が多いが、文化や歴史だけでは、飽きてしまうのである。自然を堪能するアクティビティをもっと多く準備し、発信すべきであるとのことである。また、中国や韓国からの観光客は数が多いが、それは日本が近くて安いからで、彼らは2、3日の

滞在で日本人の行動パターンに似ている。しかし、やはり歴史と文化だけでは飽きる。次のステップへと進むべきであろうと、持論を展開した。

また、このように観光客を受け入れるには、各地の観光インフラの整備も必要とのことである。歴史・文化に関する説明にしても、観光客が日本に来て何かを学び、国にかえってそれを自慢できるような情報発信が必要である。また、5つ星ホテルが日本には少なく、観光客一人当たりの収入が多くなっていない。数は少なくとも大金を使う観光客がもっと来るような整備も必要となるという。

日本は戦後人口が劇的に増加したが、その分、日本は今後劇的に人口が減少する。日本には、どの国も体験したことのない経済打撃が来る。その時に、経済の損失を埋めて、福祉制度を維持するためには、観光産業を伸ばす以外に方法はない、と力説して話を締めくくった。

その後、指定討論者として、ロンドン大学アジア・アフリカ研究所教授のタイモン・スクリーチ氏との討論が行われた。まず、スクリーチ氏のご専門である江戸時代における「観光」の例として、当時の川柳の中に、当時の「旅行」を表したものと紹介があった。「馬喰町五百の明日が四十七」（馬喰町は江戸へ旅行に来た人たちが泊まる安宿があった街。五百と四十七は観光名所を指す。五百は本所羅漢寺の五百羅漢。四十七は泉岳寺の赤穂義士の墓。）

そして、その後、2つの質問が投げかけられた。

一つは、観光発信といっても、どこか重点的に発信した方が良いところはあるかという質問であった。答えとしては、47都道府県につき、平均して2か所ずつくらいは発信があり、そもそも現状として発信の偏りはないこと、また、観光客も日本のかなり奥まった場所まで観光で足を延ばしているので、どこか重点的に発信することは考えない方がよい、とのことであった。

もう一つは、外国人観光客が来過ぎることによって住民の生活が脅かされる問題にはどう対処すべきかということであった。答えとしては、海外の例（イタリア・ベネチアなど）を見ると、日本の現状よりもはるかに多い観光客が来て、初めて観光公害が問題になるとのことであった。まだ日本の現状はそれを考えるところまで来ていないとのこと。こういったことは行政の対応で緩和できると考えているが、そういった対応は日本は得意ではないと感じるとのこと、そういった点は諸外国の例から学ぶべきだとのことであった。

最後に、フロアからの質問を3つ受けていただいた。

まず、人口が減少している日本で、誰が高いサービスを維持して観光産業を担うべきか、という質問が出た。これに対しては、今日の話の冒頭の例に戻るが、まず、日本のサービスが「高い」と言えるのかという反論が説明された。日本のサービスは自己満足であり、外国人観光客からすると、全然良いサービスではないことが多いとのことである。それを改善したうえで、対応策を考えるとしたら、日本はもっと女性を活用すべきであろうとのことであった。日本は女性の活躍がまだ少なく、こういったサービス提供は、外国では女

性が担うことが多いとのことであった。

次に、今回の話のように大幅に観光産業を展開するのではなく、例えば、英語を話せない人にターゲットを絞った観光産業、海外で日本語を勉強している人に絞った観光産業の展開にするというほうが良いのではないかと、という指摘が出た。これに対しては、人口変化に対応するための産業の拡充を考えると、特定の人に的を絞った観光産業の展開では大幅な収入増を期待できないので、これまで日本のどこにもない大きさの産業展開を考えていかなければならない、とアトキンソン氏からの再説明があった。

最後に、5つ星ホテルを増やすべきという話に関連して考えると、富裕層をターゲットにすべきだと聞こえる。それよりも、将来を担う若者にたくさん来てもらうようにしたほうが良いのではないかと質問が出た。この質問に対しては、まず、来日客の70%が30代以下の若者であるというデータが示された。また、こういった人々のためのサービスはすでにある程度整っていることも説明された。若者だけにフォーカスすると、利益が生まれないが、富裕層は少ない人数で大きな金額を使う。今日の話は、今の日本にないもの話をしたのであって、若い観光客を排除しようとする考えなのではなく、足りないところを補って、もっと大きくしていくべきだということであった、と補足があった。

以上で、やや規定の時間をオーバーしてアトキンソン氏の講演は終了となった。「日本は大国であるということ意識し、足りないものを補わなければならない」と、ご講演をまとめてくださった。会場となった101の教室に多くの聴衆が来場し、デービッド・アトキンソン氏とタイモン・スクリーチ氏への拍手で締めくくられ、盛況のうちに会を終えることができた。

(文責・阿部新)

2017年度国際シンポジウム「国際日本研究を考える」

場所：101 教室 日時：2018年2月10日（土）10：30～16：30

国際日本学研究院 2017 年度連続講演会・国際シンポジウム「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」は、第六回目として国際シンポジウムを開催した。第一部は講演として、迫田久美子氏（広島大学）にご登壇いただいた。第二部はパネルディスカッションとして、在外研究者3名と本学教員1名にご登壇いただいた。

1. 講演

学習者言語の研究から考える—言語研究と言語教育を繋ぐ— 迫田久美子氏（広島大学特任教授）

第一部は、まず「学習者言語の研究から考える—言語研究と言語教育を繋ぐ—」と題した迫田久美子氏によるご講演をいただいた。ご自身の日本語教育の経験から始まったご研究の展開を追い、言語の研究と教育をつなぐには、学習者視点で学習者言語を見つめることが必要だということをお話くださった。学習者の日本語の誤用研究・習得研究から、学習者の言葉に言語転移、母語干渉があることに気づき、学習者独自のストラテジーを使って、学習者独自の文法を作り出していることがわかった。その結果を教育へとつなげるために、繰り返し練習を取り入れた学習者中心・場面重視の指導を行うことが必要であること、さらに研究へとつなぐには、研究者・母語話者の思い込みを排除し、学習者中心の観点で、客観的データに基づいてかせつを検証することが必要であることを主張された。今後は、正しさよりも適切さを重視し、教室活動だけではなく ICT も駆使した指導へと広げていくこと、教育工学・情報処理といった多様な領域との共同研究進める必要があることをお話しされ、ご講演を締めくくった。

その後、本学大学院国際日本学研究院・早津恵美子院長を指定討論者として、討論を行った。院長自身の日本語教師経験も踏まえての質問と、議論があった。1) シャドーイングなど、学習者を退屈させない指導方法や効果について質問した。指導者が学習者に興味を持ち、何が好きかなどをよく知ること、言葉を必然的に使わざるを得ないような場面を作って活動させること、指導者自身が工夫を楽しむことの3点をご指摘くださった。2) 学習者による誤用と正用の判断をどうするかという質問を続けて行った。正誤の判断や習得したかどうかの判断は難しく、何を研究するかによっても正誤は異なるだろうとのことであった。3) 母語話者の習得過程での誤用と学習者の誤用に違いはあるか、そういったことが研究や教育に役立つかといったことも伺った。当然、日本語母語話者の習得や誤用を見ることも大切であり、違うところだけでなく同じところも探ると研究の展開があるとのこと助言をいただいた。4) 最後に、広い視野からの日本語教育研究を目指す、我々にアドバイスをいただいた。単なる言葉の研究ではないということ、言葉を教えるという視点だけでは

ないものを意識し、古代語、方言など隣接分野の研究からの視点も役に立てていく必要があることのことであった。

2. パネルディスカッション

第二部は、休憩を挟んで午後から、以下の在外研究者 3 名と本学教員 1 名による「研究言語としての日本語」と題したパネルディスカッションを開催した。(以下、講演順)

- ① 日本語との出会い—ある多言語話者の日本語学習に関する観点 (バルバラ・ピッツィコーニ氏 (ロンドン大学 SOAS))
- ② 日本語と日本史 (ジョン・ポーター (本学講師))
- ③ 研究者として日本語を学ぶこと (アヤ・エザワ氏 (ライデン大学))
- ④ 言葉を考える・言葉で考える—研究の日本語の可能性— (寺田澄江氏 (フランス国立東洋言語文化大学 (INALCO)))

まず、①ピッツィコーニ氏からは、多言語話者である日本語学習者の、日本留学も含めた日本語学習過程の中で、日本語と日本語学習に対して学習者の観点・態度はどう変わるか、学習者の観点や日本語学習に取り組む姿勢にどう影響を与えているか、ご研究の紹介があった。②ポーター講師からは、自身の日本近世史研究における教育歴・研究歴を振り返りながら、自身の古文書読解能力の習得過程を振り返り、日本語と日本近世史研究の関係について意見を述べた。③エザワ氏からは、ご自身が、大学進学を機に日本で日本語を学び、その後学術レベルの日本語の習得なされたご経験を紹介され、「研究者として日本語を学ぶ」とはどういうことか、個人の経験を踏まえたお話をしてくださった。④最後に、寺田氏は、日本の学問の伝統で培われた概念をどう国際的研究に活かすか、異文化との関わりをどう研究の深化に活かすか、ということについて、基本的概念の翻訳の問題を事例として、お話くださった。

次に、ディスカッションでは、本学藤森弘子教授を司会としてパネリストへ質問し、さらに、パネリスト間での議論を行った。

●ピッツィコーニ氏に対して、ご自身の東京外国語大学への留学中にもアイデンティティに影響する出来事があったか、なぜこういう研究を行うことにしたか、質問した。→ご自身の留学中には今回紹介したような、アイデンティティが拒否されたり脅かされるような出来事はなかったが、教育する側になって、学習者が留学中に必ず第二言語使用者としての壁にぶつかってしまうことに接し、考えるようになったとのことであった。留学中の経験に対処できる学生もいるが、できない学生もいるので、対処法を今後も議論したいとのことである。また、発表で使われた「政治的」という表現の意味を確認した。→言葉を使うことは中立にはならない。外国語で自分を表現するにはかなりの努力が必要で、その能力は Capital (資本=力) という見方ができる。学生にはこの資本がない。この力があり、その言葉を使えることは政治的に力があることで、中立にはなり得ない。そういうことを

学生にも知ってもらう必要がある、との回答をいただいた。

●ポーター講師に対しては、現在氏が担当する授業で使用している教材作成における翻訳の問題点を訪ねた。→翻訳は史学において大変重要な問題であるとの答えがあった。的確な翻訳は、社会から言葉を切り離さず、社会の把握から始まる。自身の研究分野における「非人」を例にしても、各地のその在り方、存在形態、社会分業での立ち位置がどうなっているか考慮したうえで翻訳するのがベスト。もしくは注で説明する。無理に翻訳すると危険である。翻訳は注意深く行うべき。社会の把握という作業と絡んで翻訳すべきものである、との答えがあった。→バルバラ氏からは、翻訳する人の立場は政治的問題となるがあまり考慮されないという点も指摘された。表現をどういう人がどう解釈したかという非常に政治的な課題。文法などだけ考えると、社会学的側面の重要性が見えなくなる、とのことであった。

●エザワ氏に対しては、ご自身のライフヒストリー研究で本音を引き出す難しさがあると思うが、フィールドで外国人に話を聞かれて、相手からすぐに話をしてもらうために気を付けていることを伺った。→研究対象者である日系人には、名前で違和感は持たれないが、外見・言葉で日本人でないことは分かる。でも、馴染みは持ってもらえたとのことである。つまり、ご自身は日本社会の外から来た人間なので、日本社会に対する批判は口にしたことが良かったのだろうとのことであった。つまり、自分のアイデンティティをうまく使うことができた研究だったとのことである。

●寺田氏に対しては、フランス人学生に古典文学研究の専門的内容を教える難しさ、面白さを伺った。→古典のテキストがどういうテキストなのか。学生たちの誤用や思いもよらない理解の仕方があることを指摘なさった。それに触れて、元のテキストの特徴が分かることが多く、そういう意味で学生の誤用が面白かったとのことであった。結局は、お互いに教えあうことになる。当たり前で無意識に理解していることがあるが、学習者はそこでつまづき、それを見て自分が意識化されるところがあり、面白かったとのことである。

●パネリスト全員に対して、それぞれの研究分野で、自分だから見えたこと、明らかにしていきたい部分があったかどうか、伺った。○寺田氏：翻訳者の立場は本質的に中立的・客観的になり得ない。自分の思い込みで話さないようにするために、自分が言っていることに距離を持って言えるかどうか大切である。国際研究・共同研究で他者がどう話しているか、知るのも大変重要だ。○エザワ氏：日米で共同研究した時、アメリカの研究者が前提にする日本についての知識・情報を考慮し、それを前提にすることで、いろいろな視点を比較しながら、新しい視点が生まれることがあって、面白かった。○ポーター講師：日本史研究者とフランス史研究者の比較を行っているが、比較は大変厳しい営み。比較が表面的になるので急ぐべきではない。共通の土台を築いたうえで比較すべき。10年前から行っているが、まだ成功していない。○ピッツィコーニ氏：「客観的」ということはあり得ないのだということ認識する必要がある。比較についても、社会構造を比較するのは機械的にできると思うが、どの社会でも時代でも、いろいろなイデオロギーが共存しているので、2018年の日本はこう、となかなか言えない。イデオロギーの並存、ということしか言えないだろう。日本とイタリア、日本と社会の比較というだけでは足りない。社会の

中でいろいろなグループがどのように占めているか、という研究のほうが面白い。そうやって見ると共通点も見えてくる。

●パネリスト間でさらに議論を行った。○エザワ氏→ピッツィコーニ氏：紹介されたケースはマルチリンガルな方だが、日本語を勉強して、難しい局面に出会った。モノリンガルな方については、同じことが出てくるか？→この研究での学生はほとんどがマルチリンガル。これまでの学生を見て思うのは、日本が違うということを前提に考えているので、違えば違うほどわかりやすいというパラドクスがあるように思う。いろいろなところで育ち、住んできた人たちだが、ロンドンのような場所で生活すると、世界はどこもロンドンと同じようだと思ってしまうようだ。東京でそういうところが見つからないと学生は驚く。異文化コミュニケーションでは、通常オープンになるように教育するが、ロンドンのような街から送り出す学生には、何を教えればいいのか。自分のオープンさをクローズにしろとは言えない。どういう教育をすればいいかはジレンマだ。

3. 最後に

最後に、本学荒川洋平教授より、全6回の講演・シンポジウムについて、クロージングコメントがあった。「今回の連続講演会でやってきたことを振り返ると、日本語、日本研究を広く、深く問い直しその先を考える営みであった。その広さや深さは、日本事情、語学教育と文明論、学習者の広がり、学習者コーパスにみる日本語の特質、日本の立ち位置の広さ・深さ、日本の観光政策などを考えることで、得られた。最後に、国際シンポジウムでは、迫田先生がSLAの大きな流れを教示いただき、今後の進むべき道を教示してくださった。日本語を道具として使う国外研究者による日本研究・日本語研究の意義を示してくださった。本学にとっては当たり前のことであるが、日本の研究は日本で日本人でない、という考えではなく、国際的・学際的になることが求められているということ。国境や分野の壁を超えることのメルクマールがこの講演会だった。プロセスは簡単ではなく、ごつごつしている。予定調和的ではないものの中に、国際日本研究があるのではないか。今後も参加者が本学のメンバーが、そのように考えてくれることを期待したい。」

以上で、全6回の連続講演会・国際シンポジウムを締めくくった。最終回（第6回目）は、日本語教育関係者も多く参加し、大盛況のうちに終えることができた。また、懇親会も開催され、ご登壇の皆さまと本学関係者、参加者がさらに交流を深めることができた。

（文責・阿部新）

東京外国語大学 大学院 国際日本学研究院
2017 年度連続講演会・国際シンポジウム
「国際日本研究へのまなざし—ことば・文化・教育—」

—結びにかえて—

大学院国際日本学研究院では、2015 年度から年度ごとにトピックを設定し、連続講演会・国際シンポジウムを実施してきた。2017 年度は、日本語教育をトピックに据え、国際日本研究と日本語教育のかけ算をめざした。日本語教育の中心には、ことばを学ぶ「ひと」がいる。その「ひと」はことばを手段として、また自己実現の一つのあり方として学んでいる。学習者が主体的に学び、日本文化・日本社会とのかかわりの中で自分らしく生きていくことを支えるという観点をふまえ、「ひと」を取り巻く社会や文化、「ひと」が使うことばを意識したうえで見えてくるこれからの日本語教育とはどのようなものかについて考えていくための機会を提供するべく、5 回の講演会と基調講演・パネルディスカッションからなる国際シンポジウムを開催した。

各講演会には、平均して 100 名前後の参加者をご来場くださった。ご参加の背景として「テーマがおもしろそう」というご回答がのべ 174 件あった。具体的な感想には、「新たな視点が得られた」「学習者の学びを改めて考える機会となった」といったコメントが多く見られた。また、今年度は新たな試みとして本学関係者に指定討論者をお願いした。当研究院が一つの「ハブ」となり、国際日本学、そして日本語教育学を社会に開かれた形にしていくために、第一線でご活躍の方々興味を持つ人々を繋ぐ存在として、本学関係者が内容をふまえた質疑を行った。この点については「かけ算のコンセプトがおもしろかった」というコメントをお寄せいただくことも多かった。満足度の高いコメントが戴けたのは、ご講演者と指定討論者を快くお引き受けくださった先生方のおかげである。改めて感謝申し上げます。

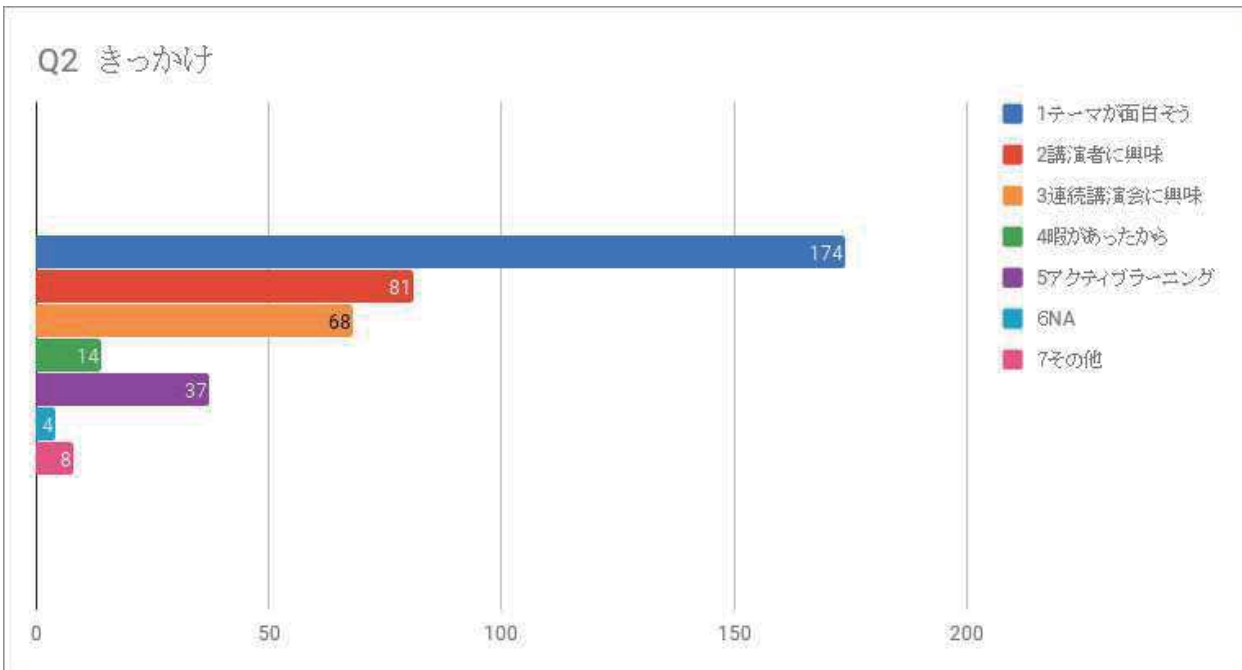
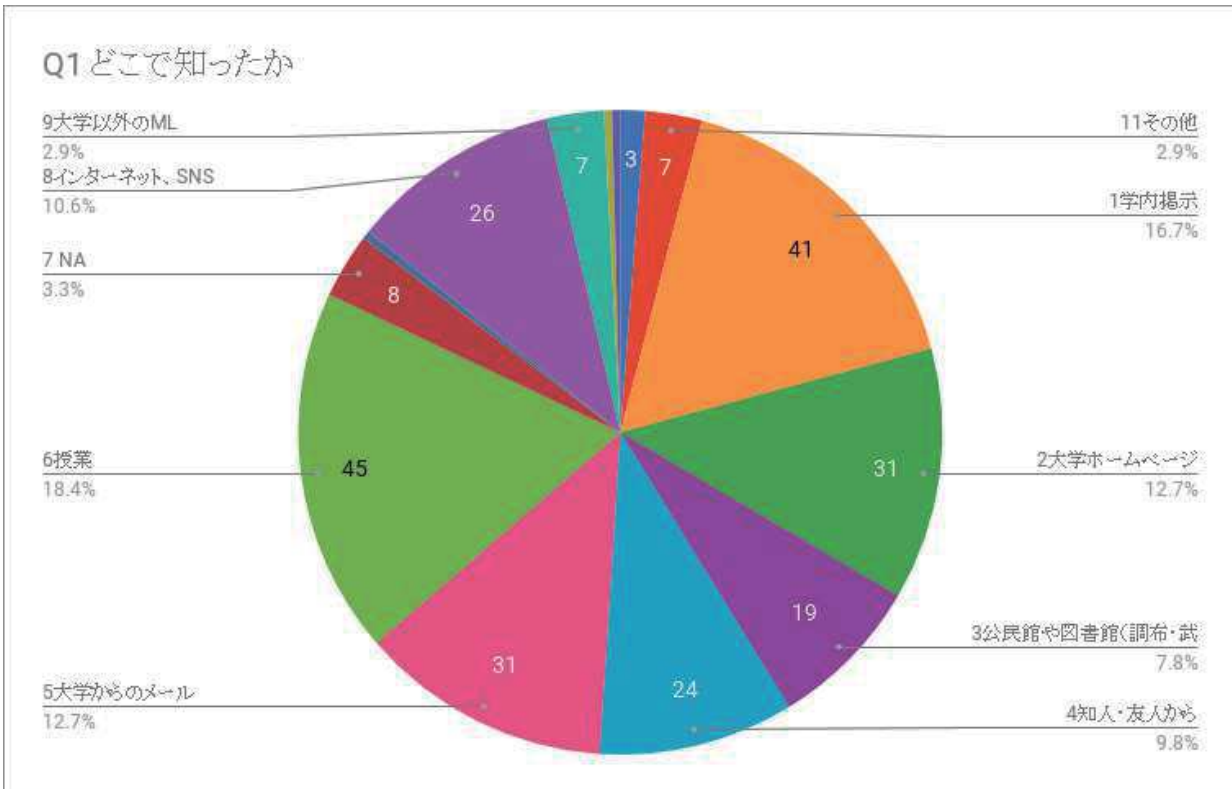
なお、参加者の年代は 10~20 代が 40%を占めていたが、30~40 代が 24%、50~60 代の方が約 30%であった。これは、幅広い世代が今回のトピックにご関心を寄せておられるということであろう。さまざまな世代が興味・関心を共にしていることは、今後の分野の発展につながる場所である。本企画を通して改めて感じたのは、日本語教育がすそ野の広い分野であり、ご専門分野ではない方々どうしを受け入れる土壌があること、そして、その豊かな土壌をはぐくむために、幅広い議論を今後も行っていくことが重要であるということであった。今回の企画が参加者個人の変容に、そして、今後の研究と社会の発展に少しでも寄与できれば幸いである。

未筆ながら、この場をお借りして、スタッフとして対応してくださった教務補佐の方々、当日の運営を支えてくださった本学の学生の皆さんに、心から感謝を申し上げます。

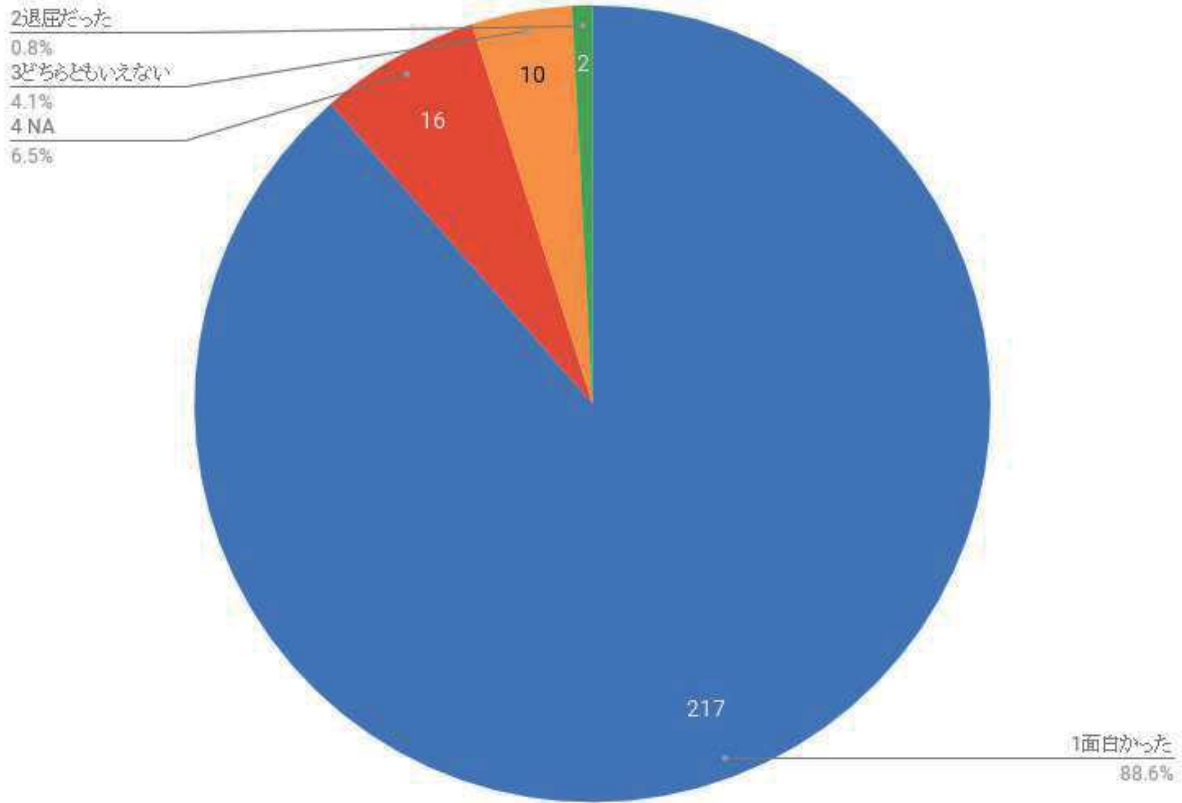
(文責・石澤徹)

アンケート総数

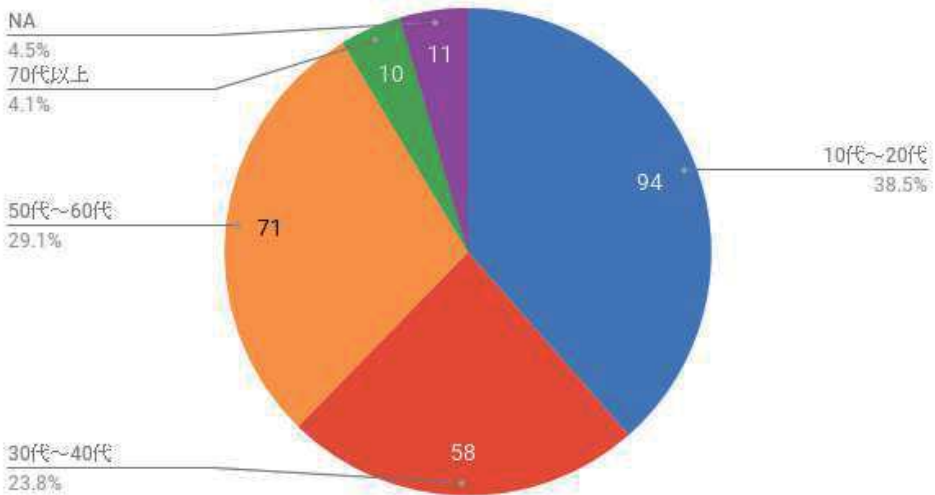
245



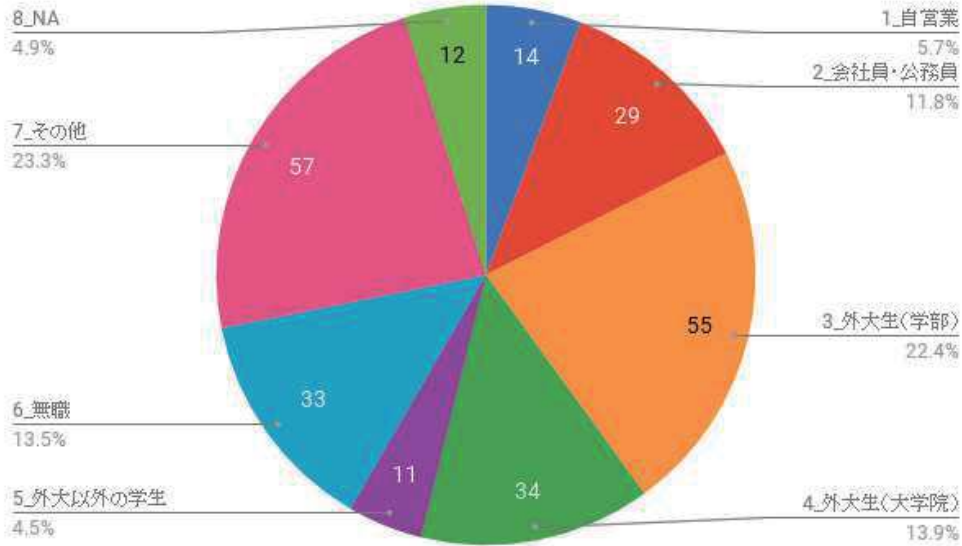
Q3 感想のカウント



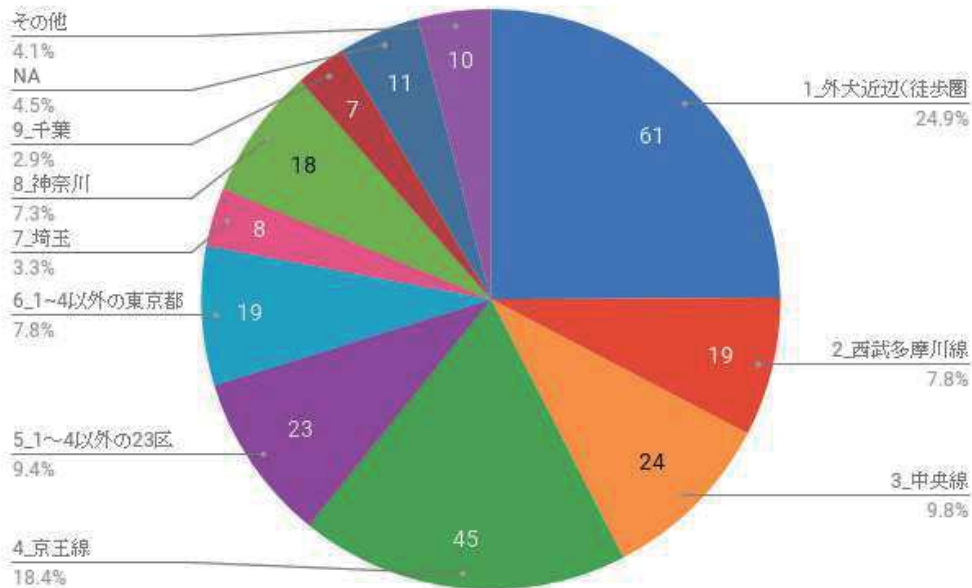
F1 年代のカウント



F2 職業のカウント



F3 住所 のカウント



連続講演会+シンポジウム アンケート

1 2 3 4 5 6

本日はご来場ありがとうございました。

今後開催予定の講演会などをより良いものにするために、以下のアンケートにご協力ください。

Q1 どこで知りましたか？

- | | | |
|----------------------|------------|--------|
| 1 学内掲示 | 4 知人・友人から | 6 授業で |
| 2 大学ホームページ | 5 大学からのメール | 7 その他: |
| 3 公民館や図書館(調布・武蔵野・府中) | | |

Q2 来ようと思ったきっかけを教えてください(複数可)

- | | | |
|--------------------------|--------------|--------|
| 1 講演テーマが面白そう | 4 暇があったから | 6 その他: |
| 2 講演者に興味がある | 5 アクティブラーニング | |
| 3 今回の連続講演会+シンポジウムに興味を持った | | |

Q3 感想を教えてください。また、ご自由にお書きください。

- | | | |
|---------|---------|-------------|
| 1 面白かった | 2 退屈だった | 3 どちらともいえない |
|---------|---------|-------------|

※ 詳しい感想があればお書きください

Q4 外大でのイベントで、これまで面白かったものがあれば教えてください。(いくつでも)

・ (イベント名)

・ (理由)

Q5 他に何か気づいたことがあれば、お願いします。

以下の質問は、集計の時にデータ化して用いるものです。よろしければお答えください。

F1 年代

- | | |
|----------|----------|
| 1 10-20代 | 3 50-60代 |
| 2 30-40代 | 4 70代以上 |

F2 職業

- | | | |
|-----------|------------|-----------------|
| 1 自営業 | 3 外大生(学部) | 5 外大以外の大学生/大学院生 |
| 2 会社員・公務員 | 4 外大生(大学院) | 6 無職 |
| | | 7 その他: |

F3 住所

- | | | |
|--------------|--------------|---------|
| 1 外大近辺(徒歩圏内) | 5 1-4以外の東京都下 | 8 神奈川 |
| 2 西武多摩川線沿線 | 6 1-4以外の23区内 | 9 千葉 |
| 3 中央線沿線 | 7 埼玉 | 10 その他: |
| 4 京王線沿線 | | |

今後も今回のような講演会などを企画しています。

参加してみたい、情報が知りたい、という方は下記ご記入ください。

現在DMが届いている方は、お名前のみをご記入ください。

ふりがな

名前

メールアドレスまたは住所